

2023年1月8日 午前礼拝
「父の心と兄の心」 説教者：堺希望伝道師

【引用聖句】

ルカ 15:25～32

25. ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。
26. それで、しもべのひとりを呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、
27. しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、お父さんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』
28. すると、兄はおこって、家に入ろうともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。
29. しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下されたことはありません。』
30. それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』
31. 父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。』
32. だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』

【説教要約】

一般に、放蕩息子と呼ばれるこのお話は、多くの方々が聴かれたことのあるものだと思います。このたとえ話の趣旨はこうです。父親と二人の息子がいました。弟がある時父に対して、「遺産を先にもらいたい」と言い出します。

父は弟と兄に自分の財産を分け与えてあげます。弟は財産を得ると、すぐに家を出て、遠くの国で自由に暮らします。ところがもらった財産を使い果たし、飢饉が来て食べ物に困り果てて、彼は低俗な仕事と見られていた豚の世話をする仕事に行きつきます。

豚の世話をしているときに、彼は父の家で暮らしていた時のことを思い出します。同時に、父を愛さず、自分のために遺産だけ要求して好き勝手なことをしてきた自分の姿に気が付きます。「こんな私は、父に息子として受け入れられる資格はない」と。彼は息子ではなく、負い目のある労働者として父のもとに帰ろうとします。

ところが、家からまだ遠いところから、父親がなりふり構わず走って来て、彼を抱きしめるのです。そして、彼の償いの言葉も聞き終えないまま、父は大喜びに家族として彼を受け入れ、身なりを整えてあげて、村中を挙げた大祝宴を開くのです。

そこに、お兄さんが畑仕事から帰って来て、宴会騒ぎの声を聞きます。その宴会が帰って来た弟の為であると知り、兄はカンカンに怒って家の中に入りませんでした。そこで父が家から出て来て兄をなだめますが、兄の怒りは収まりません。すると父は最後に言うのです。

「子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。」

イエス様はこのたとえ話の中で、2つの生き方について語られます。片方は弟のように、束縛や規律から抜け出して、自分の自由を追い求める生き方。もっと言えば、自分勝手な生き方です。もう片方は逆に、規律を重んじ、神に服従して生きる生き方です。

しかしイエス様はこのたとえ話の中で、2つの生き方がどちらも正解ではないと示されるのです。本来は弟と兄、両方で一つのお話ですが、今日は特に兄の生き方に焦点を当てて見てまいりたいと思います。

①父と兄の違い

ルカ 15:29~32

29. しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむと言って、子山羊一匹下さったことはありません。』
30. それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』
31. 父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。』
32. だがおまえの弟は死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』

弟が帰って来て、父が盛大な宴会を開いていると分かった時、兄はひどく怒りました。宴会の中には入っていきませんでした。その理由を彼自身が父にぶつけています。

「ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむようにと、子やぎ一匹下さったこともありません。それなのに、遊女と一緒にお父さんの財産を食いつぶした息子が帰って来ると、そんな息子のために肥えた子牛を屠られるとは。」

兄は、ひたすら父に仕え、戒めをしっかりと守り、文句のつけようのない生き方をしてきたはずだと自負していました。そんな兄は激しく傷つき、父に怒ります。その理由は、父が自分に正当な報いをしてくれないからでした。

弟は、父の戒めなど気にもかけず、家を後にして好き勝手に生きました。しかも、出て行く時に父に遺産を求めたと言うことは、「お父さん。あなたとはもう一緒にいたいくないし、

死んでも構わないけれど、あなたの財産は欲しいからくださいね」と父にひどい態度を取ったと言う事です。誰がこんな息子と一緒にいたいと思うのでしょうか。

しかし父は、その息子が自業自得の目にあっているのに、責めもせずに受け入れたのです。子牛を食べることは、当時でも特別な食事で、子牛を使った食事の際は大きな祝い事として村中の人が集まるような出来事だったそうです。父は、弟の帰還に惜しげもなくよく肥えたものを用意しました。

しかもその子牛は、本来なら兄のものになるはずの財産から出された物でした。兄はその父親の姿勢に不公平さを感じました。「弟は昔も今も損害と迷惑ばかりかけている。自分は精一杯父に従っているのに、その自分には子牛どころか、ずっと安い子山羊すら報酬としてくれたことはない」と。

それに対する父の答えは、「子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。」というものでした。

「子山羊だ子牛だという問題は、そもそも遺産としてすべてがお前のものだ。そんなことより、弟はここから離れて一緒にはいなかった。死んでしまったようなものだった。だが帰って来たことは、弟が生き返ったようなことだ。このために大喜びするのは当然じゃないのか？」という投げかけです。

問題の中心は、兄は報酬に関心があり、父は弟の帰還に関心があったということです。兄はなぜ怒ったのでしょうか。兄の怒りが爆発したのは、裏を返せば報酬のために父に従っていたということです。従順に父に従っていましたが、その心の奥底では父自身が大事なのではなく父の財産を愛していたのです。それは結局、遺産を求めた弟と同じだったということです。

一方父は、弟の帰還に最も関心がありました。弟が散財した財産を償う事や、顔に泥を塗ったこと、どんな生活をしていたかなど気にしませんでした。ただ、父のもとにいたことが幸いだと戻って来たことに価値がありました。

それは兄に対しても同じだったのです。宴会が開かれている中、外で怒っている兄に対して、父は優しく振る舞います。父が望んでいたのは、兄が父と同じ心になって、兄も弟と同じように家の中に入って宴会に参加してくれることでした。そして、父が喜んでいるように、兄もその喜びを共にして欲しいと言う事でした。

怒る兄に対しても、父は威厳をもってしかりつけることができました。しかし、兄の心がそれを悟るまで優しくなだめるのです。私たちは、違反することが罪であると知っています。特に倫理的に許されないこと、道徳的なことが大切であることを知っています。

しかし罪とは、弟のようにあからさまな違反ではなくとも、兄のように目立った違反がない人物の心の中にもあるのです。それは、何かを達成して自分で自分を正しいと認めるプライ

ドです。それは父である神様御自身よりも父の財産を求める心、見返りのために服従する姿勢となっていくます。

ピーター・シェーファーの戯曲「アマデウス」という作品の中で、サリエリという作曲家が若い日にこのように祈ります。

「私を偉大な作曲家にしてください。音楽を通してあなたの御栄光があがめられるために私を有名にしてください。そうしてくださったら、私は一生をきよく生き、熱心に働きあなたに忠誠を誓い続けます。そして私の周りの者をできる限り助けます。アーメン」

こうして彼は、音楽一筋で生き、同世代の人々が振り向くものに目も向けず、熱心に努力し、無償で音楽を教え、貧しい人々を助けました。仕事も順調になり、神は自分の祈りをきかれたと信じていました。

そんな中、天才モーツァルトが出現します。モーツァルトはサリエリよりはるかに天才でしたが、弟のように奔放で女たらしでした。そんなモーツァルトを前に、サリエリは独白します。

「私は神の賜物に相応しい人間になるべく、あらゆる誘惑を排除して生きてきた。だがあのモーツァルトは、間もなく婚約だというのに、なんの咎めもなしに欲望のまま生きている」そうしてサリエリは、神様に「あなたとは今から敵だ」と言い放って、モーツァルトを殺害しようと動き始めるのです。

兄は弟と自分を比べていました。そして、「自分ならあんなことはしない」と弟を見下し、自分こそお父さんから報酬をもらうのに相応しい人間だと思っていたのです。だからこそ、父の基準が報酬ではないことを目の当たりにした時、兄は「裏切られた」と思ったことでしょう。そして今まで神様のためにしてきたことが怒りへと変わったのです。

私たちの人生にも、これに似たようなことはないでしょうか。神様のために、と思って生きてきたにも関わらず、望んだ報酬が得られなかった時に、「どうして！」と思う瞬間はありませんか。自分がこんな目にあうはずがなかったのに、と思うことはありませんか。

しかし、そうってしまうのは神様ではなく報酬を第一に求めているからなのです。父の基準は報酬ではありません。父は弟にも兄にも溢れるほどの恵みを与えたいと思っておられるのです。もし、私たちが神様御自身を求めるのではなく、神様から何らかの報酬を得るために生きるなら、そこには本当の満たしはありません。

兄はずっと父と一緒に暮らしていましたが、その心の中には我慢と苦々しさがありました。父と一緒にいられる喜びや感謝から仕えてはいないからです。私たちも、動機を間違えているとき、そこに喜びはありません。祈りや奉仕、忍耐の限りを尽くしているかもしれませんが、それは心を渴かせるだけです。それを神様は望んでおられません。

②本当の兄

では、どうしたら義務からではなく喜びから仕えることができるのでしょうか。いつも父の喜びの祝宴にいられるのでしょうか。それは、私たちのために支払われた代価を知ることです。

実は、この放蕩息子のたとえ話は、連続する3つのたとえ話の内の最後のひとつです。その一つ目は100匹の羊を持つ人が、いなくなった1匹を捜し求める話。

二つ目は、10枚の銀貨を持つ女の人が、なくなった1枚の銀貨を探す話です。いずれも、捜しまわって見つけ、大喜びで近所中の人と喜びます。それらの話の最後にイエス様はこう締めくくります。

ルカ 15:10

あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」

同じように、放蕩息子の話も弟が帰って来て喜びがある話です。しかし、この放蕩息子の話だけ、他にはない点があります。それは、誰も捜しに行かないということです。弟は放浪の旅に出たまま、誰も捜しに来てくれる人はいませんでした。私は、本当は兄が行くはずの立場だったんだろうと思います。

しかし兄は弟が遠くの国で暮らす身の安全や悲惨な人生を嘆くこともせず、弟をむしろ見下して自分が正当な報酬を受けることを待ちわびていました。帰って来た弟を喜ばず、自分の報酬が減ることに気を留めていました。

本当だったら「おとうさん、あの弟は愚かでアホなことをして、お父さんの顔に泥を塗って出て行きました。しかし心配です。わたしの財産をなげうってでも弟を捜しに行ってきます」と父と同じ心で言うはずでした。

このたとえ話の中に、弟を捜しに行く人物はいません。しかし、現実には理想の兄がただ一人おられます。その方が神の子イエス・キリストです。エデンの園で、アダムとエバは神と共にいられる幸いを放棄して罪を犯し、神様の前から出て行きました。

私たち全人類もまた、一人一人が神の前から出て行きました。それぞれ自分が価値を置く事のために生きて、決して満たされず、人生も人間の尊厳も知ることはできませんでした。

しかし私たちの兄であるイエス様は、ご自分の持つすべての天の財産をなげうって私たちを捜しにきてくださいました。完全な祝福と幸いの中におられた方が、その場所を出て人となって下って来られたのです。

そして私たちが本来支払うはずだった代価、永遠の死と永遠の孤独、永遠の放浪を味わってくださいました。十字架の上で、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」とイエス様は叫びました。

私たちの代わりに神から捨てられ、罪の罰を受けられたのです。だから私たちはこの方によって、神の家族とされることが出来ます。ローマ兵に服をはぎ取られ、生きる権利を奪われ、まっとうな人としての尊厳を奪い取られました。私たちがまっとうな人間としての尊厳を持って生きるためです。

イエス様が十字架の上で支払ってくださったものこそ、私たちを父のもとへ帰す代価だったのです。

イザヤ 53:6

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

今の私たちのために、このキリストが支払ってくださったものを深く知っていくことこそ、父の心を知ることです。

このイエス様は、放蕩息子に出てくる兄のように、「あんな弟のために犠牲を払うなんてとんでもない」と考える方ではありません。むしろ私たちの為にご自身の持つておられる財産といのちのすべてを捨てて、私たちのそばに来てくださった神なのです。

皆様。怒りや恐れが動機となっている一つ一つを、キリストの恵みを知ることによって愛と感謝、喜びに置き換えていくことが私たちには必要です。それはキリストの内にしかありません。

この方を知るまで、私たちは自分の財産のことしか考えることができませんでした。しかしこの方によって、私たちは変えられることができます。他ならぬ天の父がイエス様を通して宴会に私たちを招いてくださっているのです。

ですから今日、ご自身の内にある苦い思いを見つけたら、それを主の前に祈ってください。イエス様はその部分を変えて、満たしてくださいませ。その時こそ、神様だけが私たちの満足となり、すべての点で喜びから父に仕えることができるようになります。

そしてイエス様をご自分のすべてをなげうって捜してくださったように、今度は私たちも、まだ神のもとに帰ってこない弟を捜しに行くのです。